

## 「知事とのわいわいミーティング」(平成19年12月7日実施) つがる会場の概要について

「知事とのわいわいミーティング」を12月7日(金)午後2時から、つがる市の生涯学習交流センター「松の館」で開催しました。当日の概要をお知らせします。

「知事とのわいわいミーティング」は、知事と県民の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。今年度は、合併した市町にうかがって実施することとし、つがる市は今年度第2回目の開催となりました。

当日は、約20名の市民の方が参加され、6名の方からご提言・ご提案がありました。その概要は、次のとおりです。

---

### 三村知事あいさつ

みなさん、こんにちは。

私たちのふるさと青森には、140万の県民が暮らしています。140万人一人ひとりの命がこの我々のふるさと青森で輝いてほしい、そういう思いがあります。

未来デザイン県民会議では、県内の仕事の現場などを歩かせていただきながら、地域の方々が考えている県政への様々な思いやアイデアをいただいています。それらの中からは、県の事業として具体化しているものもあります。



ここつがる市は、歴史をたどってみますと、先人達の新田開発の努力により日本に名だたる大田園地帯となりました。砂丘地帯では、メロンやスイカといった様々なものを作付けしながら、元気に頑張ってくれています。

更に歴史をさかのぼりますと、縄文という輝いた時代がありました。家族や地域がお互いに支えあって生きていたことが住居形態からうかがわれ、素晴らしい歴史があるということを今日改めて感じました。縄文遺跡群を世界文化遺産にできないか、北海道、岩手県及び秋田県を含む4道県共同で、提案することとしています。当地の「シャコちゃん」のみならず、これまでのさまざまな縄文の歴史がありますが、応援いただきたいと考えています。

皆様方とのお話が実りあるものとなることを心から望みます。

冬になり雪が降ってきましたが、青森を共に元気にしていきたいと思います。

### **つがる市・福島市長あいさつ**

ここつがる市は、平成17年2月に合併した後、各地域の農産物8品目でつがるブランドを立ち上げ、その確立のために、今一生懸命に取り組んでいるところです。

また、縄文の里としてのスタンスもあり、市を売り込むための素材はたくさんあるわけですが、今後、研究・検討を進める必要があると認識しています。

特に農産物のブランドで「つがる市でなければ」というものをしっかりと確立するためには、土づくりなどを基本に、地道な努力が必要であり、安全・安心な食の供給に頑張っ  
てまいりたいと思っています。

当市には、素材のほかに、人材も揃っています。発言者の皆さんは、第一線で活躍されている方々ですので、常日頃から感じていることを忌憚なくご発言いただき、知事自身からご助言いただき、それを私どもは市政に活かしてまいりたいと考えています。今回のミーティングを有意義なものにしていただきたいと思います。

### **発言者1（60歳代・男性）**

青森県と言えば、自然が豊富ということがまず挙げられます。「ブランド」ということになりますと、りんご、十和田湖、それから3市のねぶた・ねぶた祭り、弘前城が出てきます。これらはブランドとなるまでに長い時間がかかっている歴史的なブランドです。

更に、テレビで良く見かける大間のマグロも、ある程度全国的に浸透・認知されている青森県のブランドではないでしょうか。これは、島康子さんらが一生懸命情熱を注いだ継続的な企画・宣伝活動の成果だと思います。

これら以外にも、県内各地にそれぞれの農産物、名産品、史跡・名勝があります。田子町のにんにく、横浜町のなまこ、平内町のホタテ、八戸のせんべい汁。最近では黒石のつゆ焼きそば。これらはもう少し時間をかければ、おそらく青森県のブランドとして認知されていくと思います。

新幹線の新青森駅開業時には、多くの観光客がいらっしやると思いますが、そのときがチャンスです。このときに一番大事なことは、まず、ねぶたやりんごなど、確立しているブランドについて、予算的に力を入れていただくことだと思います。そのことから得たノウハウが、次の青森県のブランドを育成する活路を見出すことにつながると思います。りんごについては、さまざまな加工食品がありますが、まだまだ足りない面がありますし、大間のマグロに関しても、カブトを薫製にすれば保存期間も長くなってお土産品として十分通用するでしょう。十和田湖は、花火も大事でしょうが、サーチライトを使った人工オーロラを作るなどしてはどうかでしょう。ねぶた・ねぶたについても、一堂に集めて観光客と一緒に見せることができれば、感動をお客様にその場で与えられます。

確かに、「おらほ」の名産品も必要です。しかし、せっかく本県にいらした観光客の方を惑わせるような結果になるのでは、県として無駄になるような気がします。

宮崎県の東国原知事は、一生懸命、自分の県の農産物や名産品をPRしています。三村知事も、本県の農産物を一生懸命アピールしている姿をテレビで拝見しました。ブランドを浸透させるためには、県知事さんのその姿が一番大事なように思います。

## 知事

オンリーワンのものに集中投資し伸ばしていくべきではないか、そういったご提案でした。

JR 6 社には、平成 19 年 7 月から 9 月まで、北東北 3 県の観光キャンペーンとして「北東北グスティネーションキャンペーン」を展開していただきましたが、その際のキャッチフレーズが「もう一つの日本。その先の日本。」でした。まるで北東北が日本とは別世界

との印象を受ける言葉ですが、JALが関西方面に住んでいる方を対象に行った調査では、みんなが興味を持ち行ってみたいと思いつつもなぜか訪ねていないのが我々の青森県なのだそうです。「青森というもの」そのものが、実は、普遍的価値を持っている、そしてそれを売り込む戦略もあるのではないかと、ということを知りました。中国の上海でりんごのセールスをした際には、箱単位で飛ぶように売れましたが、これも「青森」と箱に書いてあったがためです。青森ということそのものにブランド価値が出てくるというのでしょうか、県としてはそういった観点からの戦略を進めています。

県には、若手職員のアイデアをもとに作られた「まるごと青森情報発信チーム」があります。いろいろなところに、青森県そのものの「すごさ」というものを宣伝し続けてきました。ここつがる市に関わるものとして、今年度重点的に情報提供しているものには、メロンロード、砂丘長いも、じゅんさい、それから、津軽百年食堂の一つとして木造駅前の神武食堂などがあります。テレビ・新聞・ラジオなどのマスコミやミニコミ誌など、いろいろなところに自ら出向いて、青森にはこんなに面白いものがあると売り込んで、記事にしてもらっています。その成果の一つが、漫画「美味しんぼ」です。単行本の第100巻は、まるごと全部、青森県の料理・食材の特集です。そして、「サーベイ青森」。これは、単なる観光ガイドではなく、お客様の声として○や△のマーク付きで店や施設を紹介しています。口コミ情報満載のこのような形によるガイドブックは、県と出版元の昭文社さんがアイデアを出し合って実現したものです。カリスマシェフの熊谷喜八さんには、「青森の四季を料理する」とのサブタイトルがついた、青森県産品を食材にしたレシピ集を刊行いただきました。

私たちとしては、青森全部、青森そのものを宣伝し、あっちこっちで青森が元気だな、青森の情報が多いな、なんか青森に行ってみたいな、というような、青森県を作っていきたいと考えています。

このように青森というものの全体を宣伝しているのですが、一方では、ただいまお話しただきましたオンリーワン戦略についても、しっかりと我々の戦略の中で考えていきます。

ねぶた・ねぶたを一箇所に集めて開催しては、とのアイデアは刺激的ですが、具体化となると、同じ市で開催するのはどうか、といった意見も出てきそうです。大間のマグロは我々がセールスに持っていくとすぐに売れますし、十和田湖冬物語についても、最近コストも考えながら、ロウソクの光でムードを出すような演出が行われています。

## 発言者2（40歳代・男性）

縄文遺跡群の世界文化遺産登録の話にはすごく期待しています。私もその一翼として活動に参加させていただいています。今現在、三内丸山遺跡や是川遺跡は、わりに整備されています。ニッ森貝塚がある七戸町と結べば、新幹線のルートにも重なりますが、その先にある本当の縄文の聖地はここつがる市ではないか、一番魅力的で一番何かを秘めている地がつがる市だと思っています。しかし、お金がかかることもあって亀ヶ岡遺跡の整備はなかなか進んでいません。先日、岩手県一戸町の御所野遺跡や秋田県鹿角市の大湯環状列石を見て来ましたが、すごく整備されていて、世界遺産をみんなで勝ち取ろう、頑張ろう、そういう意気込みが感じられました。

私たちも、「縄文荒吐（あらばき）会」という創作太鼓を続けて、シャコちゃんをテーマに20年間やってきましたし、「亀ヶ岡縄文塾」という形で1年に1回フォーラムを開くなど、いろいろな受け皿になろうと思っています。

相当お金がかかることだと思うので、簡単にはできないかもしれませんが、世界遺産の候補地として、県は、縄文遺跡群を、縄文ロード、縄文街道として売り出していくのだと思います。その場合、是非、知事のお力添えをいただいて、国・県・市が一体となった取り組みをしてほしいと思います。これは、観光面だけではなく、教育・文化、いろいろな方面に波及します。東日本全体にまたがっている縄文遺跡群ですが、一番の魅力が青森県に集中しているということは間違いありません。縄文こそ青森県の顔になるべきだと思いますので、つがる市の亀ヶ岡遺跡を支援していただきたいと思います。

## 知事

我々こそ、一緒にやってくれませんか、というお願いがあります。

縄文の遺跡があるぐらい素晴らしいふるさとであった我々の青森県。そこに住んでいることは我々の誇りです。

さて、白神山地の世界自然遺産への登録に続く、亀ヶ岡遺跡を含む縄文遺跡群の世界文化遺産への登録については、北海道、岩手県及び秋田県を含む4道県で連携して取り組んでいます。出土数とその質から、我々青森県が中心に進めることとなっています。

日本の国に、弥生ではない、もう一つの大きな基層文化、元となる非常に重要な文化圏

があったということを世界に認めてほしいと考えていました。世界に認められるということは、奈良や京都だけが日本ではなく、もう一つの日本がこの北の地域にあったのだということが認められることですし、我々の血の中に受け継がれている先祖が生きていた時代が認められることでもあり、我々自身につながってくることです。

しかし、縄文文化に対しては、ケルト文化ほどの世界的価値があるのかといった疑問の声を聞くこともあります。そこで、まずは学術的な意味での縄文文化の「価値の高さ」というものを示していきたいと考えています。文化人をお招きしてのシンポジウムの開催など、どんどんPRしていきます。

皆さんには、取り組みを進めていくにあたっての機運を盛り上げていただきたいと考えています。地産地消と同じです。自分たちのほうから最初に盛り上がる必要があります。

### 発言者3（40歳代・女性）

では、地産地消ということについてお話しします。

このあたりはコメの生産がとても多いので、学校給食でも子どもたちに地元で作ったコメをどんどん食べさせたいと考えていましたが、聞いたところでは、県産米ではあるけれども地元のコメかどうかはわからないとのことでした。



しかし、地元産のコメや野菜を給食で出してあげれば、誰々さんのお母さんお父さんが作ったものということから、残飯も少なくなるのではと思ったりしました。つがる市では、すいか、メロン、長いも、トマト、ごぼう、人参など、たくさんの野菜が穫れます。一年中通して使うのは難しいかもしれませんが、子どもたちには旬のものを食べさせてあげる、そして子どもたちには地元のもの一つのブランドとして認識してもらいたいと思います。

また、地産地消として、農産物・海産物含めて、地元の人から地元の産品をどんどん食べて、おいしい、安全ということをアピールしながらお店でお出ししたりすることや、知事さんはずいぶん一生懸命PRしているとは思いますが、外に向けてアピールしていくことが必要ではないかと思っています。

## 知事

私も単身赴任で自炊しています。野菜の値段にも関心を持っています。今、冬場になって、つがる市産のネギやごぼうがおいしい季節になりました。

学校給食についてのお話がありました。旧百石町で町長をしていたときも、自分の町のコメを食べさせてあげたいと思っていました。自分の地域で作ったものを自分の子どもたちに食べてほしいという気持ち。これはすごく大事だと思います。

つがる市では、森田地区は森田産の米を使っていますし、車力地区では車力産のコメを使っています。つがる市全体においても、可能な限り、つがる市及びその近隣の米を使うよう、市のほうとしても最大限の努力はしてくださっているということです。また、県内21市町村で地元食材活用のための協議会を作り、大豆ハンバーグ、長いもすいとんなど、107の品目が新たに活用されることとなりました。青森県の食材が学校給食に使われていることについては、教育委員会でもリーフレットを作成し、紹介しています。

地場のものを食べてこそ、身体も健康になると思います。「身土不二」という言葉があったり、あるいは、私たちの古い言葉では、身体の具合が悪くなったときは朝露を踏んで地元のもの食べていけば必ず元気になる、というものがあります。やっぱり自分たちの身体、このつがる市の人の身体は、つがる市のものを摂り入れることによって強くなっていくのだと思います。

9月から11月は地産地消推進月間として、地産地消を進めていましたが、攻めの農林水産業の基本も地産地消です。地元の人が自分たちで「これはおいしい」と思ってくれなければ、他の地域には広がっていきません。自動販売機を設置している業者の方には、県産のジュースなどを販売してもらうような仕組みなどにも取り組んでいますし、若手職員のアイデアによりできた食育宣伝隊「しょくぴ〜」は、学校や保育園を訪問しながら、食生活の大切さ、青森のものを食べることの良さを啓発しています。

## 市長

学校給食のデザートとして、地元メロンを提供するということがあります。できるだけ地元で穫れた野菜や果物を提供したいとは思っていますが、一年中出すのは難しいようです。

#### 発言者4（30歳代・男性）

青森県といえば、まずは、りんごとねぶた。これらは完全に青森のブランドになっています。自分のところで作っているスイカやコメを売り込むためには、インターネットを使う方法がありますが、まだ手が出せません。

今日、父とお昼ご飯を食べながら、青森のブランドを拡げるためにはどうすればいいか話し合ったら、テレビを使ってはどうかという意見でしたが、あおもりのブランドを押し進めるためには、農産物が最も簡単なのではないのでしょうか。

#### 知事

ネット販売については、不安なところはあるかもしれませんが、積極的に取り組まれることを期待します。

さて、県の総合販売戦略課で大事にしているのは、農林水産物の販売ルートを作ることです。ルートを作るために、最初は我々が生産者と一緒に行きますが、ルートができた後は生産者自ら取引するようになります。そこに至るまでのお手伝いをするのが県の総合販売戦略課の仕事ということになるのです。



また、県では、今、新農業トップランナー育成システムの確立に取り組んでおり、若手の農業者を求めているところでもあります。

是非、一度、総合販売戦略課にご相談ください。

#### 発言者5（40歳代・女性）

私のほうからは人づくりということでお話しさせていただきます。

私は、各種の審議会に携わっている関係から、県の各種事業の内容を知る機会に恵まれているほうです。しかし、本当に必要としている人がその事業の存在を知っているのかと



きどき疑問に思うことがあります。本当はつながっているのに各種の事業がばらばらに行われているような印象もあり、関連する事業同士の連携や、横のつながりが足りないように思うことがあります。情報の共有、コミュニケーションの必要性を強く感じています。

平成12年のNHKによる国民生活時間調査によると、青森県民の一日のテレビの視聴時間は3時間55分であり、全国で最も長くなっています。青森県民がテレビを見る時間が比較的多いのであれば、逆に、テレビやメディア等を積極的に活用して、各種事業の広報を行い、県民に事業を浸透させていくことができるのではないかと思います。

また、県からの情報発信だけでなく、県民にも各種事業への関心を持ってもらう必要があると思いますが、そのもととなるのが青森県そのものに対する誇りを持つことです。特に若い人を対象として、青森のことをよく知ってもらい、青森を愛し、誇りを持てる人間を、人を育てる取り組みをしていただいて、「県民一人ひとりが青森ブランド」になってほしいと思います。

## 知事

大変にありがたい提案をいただいたと思っています。

実は私たち、人財、人の財（たから）を育成する取り組みを進めています。人づくりは1年・2年の話ではなく、30年・50年の単位を見据えながら取り組むわけですが、県では、「あおもりを愛する人づくり戦略」を策定しました。このネーミングには、ふるさとあおもりを愛し、ふるさとあおもりの元気をつくる、そういった人財を育成していこうという意味が込められています。

青森を知ること、青森を愛することが基本です。この戦略では、「あおもりの今をつくる人財の育成」と「あおもりの未来をつくる人財の育成」との2つの方向からなる基本目標が掲げられています。「今をつくる」と言っても、今は10年単位ぐらいでしっかり考えなければならないのですが、地域の個性や可能性を生かして起業・創業、経営革新や地域おこしに果敢に挑戦していく、ふるさと青森の元気をつくる人財を育成していく取り組みです。子どもたちが夢や志を育み、必要な力を身につけて、ふるさとあおもりの元気をつくる、次代の人財として活躍するよう育成していくことを目標として掲げました。

「だからこそ、今、人財」というのでしょうか。県では行財政改革に取り組んでいます

が、そのことを通じて感じたこととして、青森には「地域人財」が多いということです。

「地域人財」とは、この青森県で生まれて、よそにいても大活躍してくれている人たちのことです。青森は、人の財（たから）の宝庫だと思っています。何事にも前向きであること、そして、どうしてこのようなことをこれほどの短時間でこなせるようになるのだろうか、そういった評判をいただいています。

攻めの農林水産業の一環で県産品を売り込む際のキャッチフレーズに「青森の正直」があります。正直に、こつこつと、生真面目に物事に取り組んでいく、それが青森の技術だと考えています。

だからこそ、我々は、もう一度人をつくるのが、このふるさと青森を長期的に浮き上がらせていくことだと考え、「あおもりを愛する人づくり戦略」をスタートさせました。



また、今のお話の中にもありましたが、自分たちの地域の魅力をどんどん知らせたい、青森に誇りを持たせたいと考えています。広報予算が全体的に減ってきている中で、特に首都圏等に向けた広報としては、まるごと青森情報発信チームに活動してもらっていますが、県内向けには、一定の広

報費用をかけながらも、ふるさとへの関心をもってもらうことなどをねらいとして、高校生に隠れた人財を紹介する番組を制作してもらう事業などを実施していますし、これも若手職員のアイデアですが、県内100の仕事を紹介するDVDを作成し、学校で子どもたちに見せたりしています。

こういったことを含め、「人づくり」ということにはこれからもきっちり力を入れていきたいと考えています。

### 政策調整課職員

他県の広報番組の視聴率は軒並み2～3%程度にとどまり、効果がないとして予算が削られている中で、青森県の広報番組の視聴率は11～14%と高い数字を示しています。

県民の皆様が良く見てくださっているテレビをフル活用して、これからも広報に取り組んでいきます。

## 知事

テレビ媒体の活用も重要ですが、読み聞かせ活動も大事です。先日、命を大切にする心を育む運動の一環で、絵本を作ることになったのはご存知でしょうか。幼稚園、保育園など、いろいろな場面で、見ること・読むことによって、自分で想像する力、考える力が身についてきます。

## 発言者6（50歳代・男性）

知事さんはよくお話をされる方ですが、青森気質といいますと、口が重い・ロベた、それから、真面目・実直。そういうふうに見られていますが、やはり一番苦手なのはコミュニケーションだと私は思っています。そこで、コミュニケーションの方法を身につけるために何かできないか、提案したいと思います。

私は、子どもたちに音楽のコンサートを見せる活動に携わっていますが、コンサートをしても、うれしいのか、楽しいのか、良くわからない子どもがいます。表現の仕方が分からないのではないかと、そんなことも感じます。

これが青森県気質だと言えばそれまでなのでしょうが、コミュニケーションの方法や表現について、小さい頃からの教育が必要ではないかと思えます。

教育と言えば、塾などの学校外の教育環境が地域によってかなり差があるのではないかと、ということも懸念しています。学力を身につけさせるために、特別なカリキュラムなどをつくれぬものなのでしょうか。

青森県では、自分たちが作っているもの、食べているものは良い、そういうふうみんなに思っているわけです。しかし、そのことをどのように説明できるのか、と問われると、たぶん誰も説明できないのではないのでしょうか。これは、コミュニケーションが下手だからだと思えます。きちんと説明できる・表現できるということが、県内にとどまらず、全国に出ていった場合に必要になってくると思えます。

## 知事

言葉で表現する力を高めていくことは重要です。

津軽弁には、「どさ」・「ゆさ」とか、「か」・「け」・「く」といった短い会話があります。津軽弁の特徴を紹介する段にはこのような短いやりとりでも十分かもしれません。しかし、自分の気持ちや感じていることをきちんと相手に伝えるということは、すごく大事なことです。ごく自然に伝えることができる能力があれば、いじめなどの問題の解消につながる部分もあるのではないのでしょうか。

先の新幹線開業を受け、「観光ビジネススクールはやて」という事業で、観光に携わる方を対象にホスピタリティ能力を養成する講座を開催しましたが、このような取り組みを続けた結果、昨年の旅行雑誌の全国アンケートでは、ホスピタリティーの良さで青森県は上位に入ることができました。これは観光面の話題ですが、日常においても、コミュニケーション能力を高めていくことは大事だと考えています。

学力とコミュニケーション能力とが結びつくのかどうかとなると、学校などでは、疑問があればその場で先生に質問しその場で解決できるようになれば、そのことが学習になるし、知恵を増やすことにつながるとは言えます。

今いただきましたコミュニケーション能力を高めていく仕組みをつくることは、我々としても大きなテーマと考えます。

読み聞かせの話になりますが、いろいろな表現の方法があり、いろいろな言葉があるということは、本を読むことにより身につくと考えます。本を読む癖をつけたり、本を読んでも聞かせること。そういったことの積み重ねが言語能力の向上につながるのではないのでしょうか。言葉を知っていれば口に出して表現できます。言葉に詰まってしまうと伝えられなくなるよりも、「これこれこうだよ」ときちんと説明できるようになること、そういったことの基礎となるのが、本を読むこと、それから、話を聞くことだと考えます。だからこそ、皆さんには、子どもたちへの読み聞かせ活動などに取り組んでいただければと考えます。

音楽を聴かせることも同じです。感性を高めることだけにとどまりません。言語能力の中には間違いなく、リズムとハーモニーとが影響する部分があるはずです。

自分も旧百石町で町長をしていたときには、蔵書に占める子どもの本の割合が6割以上となるような形で図書館を整備し、どんどん子どもたちが図書館に来て本を読んでもらえるような仕組みにしました。本を読むことによって世界が広がります。

これからも読み聞かせのこと、本を読むこと、そういうことなどを含め、我々としても、アイデアを考えていきますし、今日いただいた話は教育委員会のほうにも伝えます。

## 市長所感

農業振興、観光、あるいは、教育・人づくりについて、提案がありました。

田子のにんにくの話がありましたが、実は、つがる市の車力地域で作っているにんにくの評価も高くなっています。先ほど知事からもお話がありましたが、ネギは全国レベルです。名古屋や大阪でセールスに歩きましたが、メロンの評判も徐々に上がってきています。じっくりと分別しながら取り組んでいきたいと考えています。

また、小学校・中学校の学力も、だんだん上がってきています。基礎学力の向上ということでは、昔から言われている、読み・書き・そろばん、これらを徹底していきたいと考えています。

縄文遺跡の話もありました。この地域にあるせっかくの遺跡群です。みんなで相談しながら、また県の指導も得ながら、大事にしていきたいと思えます。

## 知事所感

どうしても心の中に熱いものがあると、話したいという思いに駆られます。皆様方のお考え・アイデアをおうかがいすると、「なるほどな」と考えさせられます。

自分自身は、町長から政治の世界に入りました。町長とは、一つひとつの集落の誰がどうしている、どこの子どもがどうしている、そこまで覚える仕事です。国会議員であったとき、同じく町長を経験された方が「地べたで一生懸命歩くこと」の大切さを口にされていたことを思い出します。町長は、町民の方々、自分の町のいろいろな方と常に対話し、その地域の声、地域の風、におい、まさに地域そのものを肌で覚える、そういった経験が大事だと言われたことを、今、思い出しています。

さて、合併して誕生したつがる市です。つがる市の皆様方から、まさにこの地域にあるところの思いというもの、地域の声、それをうかがうことができました。私どもとしても、可能な限り、地域とともに歩んでいきたい、だからこそ地域県民局を設立し、地域県民局長を置きました。皆様方とのコミュニケーションを大切に、その中から青森県の課題とは何か、地域を元気にしていくための方策とは何か、模索し続けています。

今日いただいたお話は、県政に活かし、少しずつでも青森県を良くしていきたいと思えます。

本日は、貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。